

第4回 3限

『批評理論入門』廣野由美子著 中公新書 2005年

第1部5「提示と叙述」・6「時間」について

大下 由佳

5 「提示と叙述」

《キーワード》

提示……語り手が介入して説明したりせず、黙ってあるがまま示すこと。

登場人物の会話など。

叙述……語り手が前面に出てきて、出来事や状況、人物の言動や心理、動機などについて、読者に対して解説すること。語り手の要約など。ポストモダニズムの作品で用いられ始めた。

＊両者に優劣はなく、作品の各部分でそれぞれふさわしい方法が選択される。

《章の要点》

提示、叙述、それぞれの解説をしたのち、「フランケンシュタイン」での提示、叙述のされ方を説明している。（治安判事へ告訴を求めに行く場面。）そして、怪物の創造過程が提示の方法で詳しく語られることなく、叙述にとどめられているのは、読者がヴィクターに共感する部分を持ちながら最後まで読み進められるようにしているからだと主張している。

《概念定義・理論補足》

ポストモダニズム

「モダニズムの芸術と文学の反伝統主義的実験を極端な形で継承したもの」、「モダニズム期に陳腐となった多くの慣例からの決別をした」もの。「〈ハイ（高級）〉文化と〈ロウ（低級）〉文化の間の区別を転倒しようとして」おり、「歴史とか小説とかいう区別が人為的であることにつけこ」んだ作品が多い。

《語彙・人名・地名》

ウェイン・ブース

アメリカの批評家。『小説の修辞学（フィクションの修辞学）』では、物語内の客観性、作者の存在について述べている。

《意見・疑問》

ヴィクターが怪物を創造する描写が鮮明でないことに対して、P54で「正常さを備えた

語り手が、現時点から過去を振り返り、感慨をこめつつ要約しているからこそ、私たちは彼に対する共感を保ちながら、最後まで物語を読み続けることができるのである。」と書かれていたが、それはなぜなのかはっきりしないな、と感じた。そもそも「フランケンシュタイン」という物語は、読者を終始ヴィクターに共感させようとしているように思わなかった。途中で怪物に同情することもできれば、逆に憤りを覚えることだってできる。

「最後まで共感を保たせるため」に提示を控えたと捉えるのは、少し納得しない。わたしは作者が提示を用いて創造時を描けるほど、詳しくなかったからではないかと考える。

《応用可能性》

歌詞において叙述と提示は巧妙に用いられているなど感じる人が多い。長さ、拍が決められている中で伝えたいことを最も効果的に表すには、ということに向き合い、叙述で状況を説明したあと、主人公に気持ちをうたわせたりするなど、小説よりも短い一方で、緩急をつけるために効果的に用いられていると感じた。

6 「時間」

《キーワード》

- ・ アナクロニー（錯時法）……ストーリーにおける出来事の順序とプロットにおける出来事の順序が合致しないこと。

後説法……出来事の継起を語っている途中で過去の出来事や場面に移行する方法。
フラッシュバック。

先説法……まだ生じていない出来事を予知的に示す方法。フラッシュフォワード。
伏線。

- ・ イン・メディアス・レース……すでにある程度進行している物語の途中から語り始める方法。

- ・ 時間標識……作品のなかの時間を特定する材料となる具体的情報。

- ・ 物語速度

省略法……ある期間を省略して、一気に飛び越える方法。時間指定ありを「限定的省略法」、そうでない場合を「非限定的省略法」という。

要約法……数日間や数か月、あるいは数年に及ぶ生活を、行動や会話などの詳細を抜きにして、数段落や数ページで要約する方法。

情景法……物語の場面が劇的に提示され、理論上、物語内容の時間と物語言説の時間の速度が等しい場合。

休止法……語り手が物語の流れを中断させて、語り手としての特権を行使し、物語のその時点では登場人物がだれも見えていない光景や情報を示すやり方。

《章の要点》

アナクロニーにおける後説法、先説法の意味とイン・メディアス・レースについて説明した後、「フランケンシュタイン」でもこのイン・メディアス・レースが使われていることを説明。また、物語内にちりばめられた時代背景を考察するための断片を用いて「フランケンシュタイン」の設定年代を見破った J・J・ルセルクルの研究を紹介。物語内部に〈語っている現時点〉と〈語られている過去〉があることを示した。また、このふたつの時間体系はさらに複雑に絡み合っているとも指摘している。

最後にジュネットの物語の速度形式について触れ、「フランケンシュタイン」ではどのようにそれらが用いられているかについて解説している。

《概念定義・理論補足》

後説法（アナレプシス）……事件の渦中から（オランダ語 *in medias res*）始まるほとんどの物語は、その時点まで物語がどのように推移したかを説明するためにこれを用いる。登場人物の背景的情報を与えることができる。

先説法（プロレプシス）……テキストでの事件の順序とそれらの提示についての物語論的分析に用いられる場合、未来の事件がテキストの現在を中断して語られることである。

《語彙・人名・地名》

エミリー・ブロンテ

イギリス女性小説家。『嵐が丘』は悲劇的長編小説。

J・J・ルセルクル

フランスの批評家。『現代思想で読むフランケンシュタイン』にて、原作と映画の意味をさまざまな観点から紐解いている。

《意見・疑問》

フラッシュフォワードの具体例が分からなかった。現在を中断して未来を描写するということは、やはり特殊だからだろうか。SF小説だと見受けられるのかな、とも思う。

また、休止法というものが、たんにひとつの情景を描写するために時間が止まっているということなのか、登場人物の時間を語り手が止め、新たに説明を付け加えることであるというものなのか、少し理解できなかった。

《応用可能性》

イン・メディアス・レースでは、事件の渦中から物語がスタートするが、仮に物語の終わりから書き出されるのはどのようなになるのか気になった。そして、終わりから始めに戻っていくことは可能なのだろうか。身近な童話で考えてみたが、割とつまらなくなってしまう。どうにかして面白くならないか検討してみたい。

【参考文献】

杉野健太郎ほか 『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』 松柏社 1998年
P61,321,334 参照。